

12・3 小児糖尿病の遺伝学的研究

神戸大学理学部

川 辺 昌 太

東京女子医大

丸 山 博

稲 垣 直

大阪市立大学医学部

一 色 玄

対象は名古屋市名城病院，九州大学第2内科，鳥取大学第1内科，大阪市立小児保健センター，および本年度は東京女子医大小児科で丸山，稲垣の集めた患者を加えて，統計169人である。

図1で見られるように，患者の発病年齢は5才と11才に谷があるように思われるので，5才以下，6-10才，11才以上の3群に分け，何らかの類型が見出せるかどうかを分析した。表1に示すごとく，5才以下のものは，夏～秋に発病するものが多く，6才以上のものは逆に冬～春に発病するものが多かった。また，発病時尿中にケトン体強陽性(卅～卅卅)のものは，5才以下29例中18例，6才以上のもの30例中10例で，若年者に多くみられた。(表2)。両親の近親婚は7.88%で一般集団より高い。パセドウ氏病が165家系中5家系7人に見られ，これも一般集団より高い。

稲垣，丸山は別箇に小児糖尿病の家系調査を行ない，以下の成績を得ている。201家系中，患児の同胞，両親，祖父母すなわち2親等以内に overt diabetes を有する家系は52(20.9%)であった。その内訳は同胞中3.8%，両親中5.7%，祖父母中4.4%である。両親に overt diabetes を有する22家系について，親子兩世代の発病年齢をみると，患児の発病年齢の如何に拘わらず，親の平均発病年齢は29.0～34.1才とほぼ一定であった。3ないし4世代に亘り overt diabetes を続けて発生した8家系中4家系において，

世代を経るに従って発病年齢の若くなる現象，すなわち促進現象の傾向が認められた（表3）。

糖負荷試験で血糖の異常を示したものは，overt diabetes の8例を除外すると，親の世代で39.3%，子の世代で8.6%，免疫反応性インスリン（IRI）の異常反応を示したものは，親の世代で32.8%，子の世代で28.6%であった。

脳波異常は血糖に異常反応を示すものと，overt diabetes の群に多く認められ，間脳起源の異常波と考えられた。

小児糖尿病の発病年齢群の特徴

図1 患者の発病時の年齢

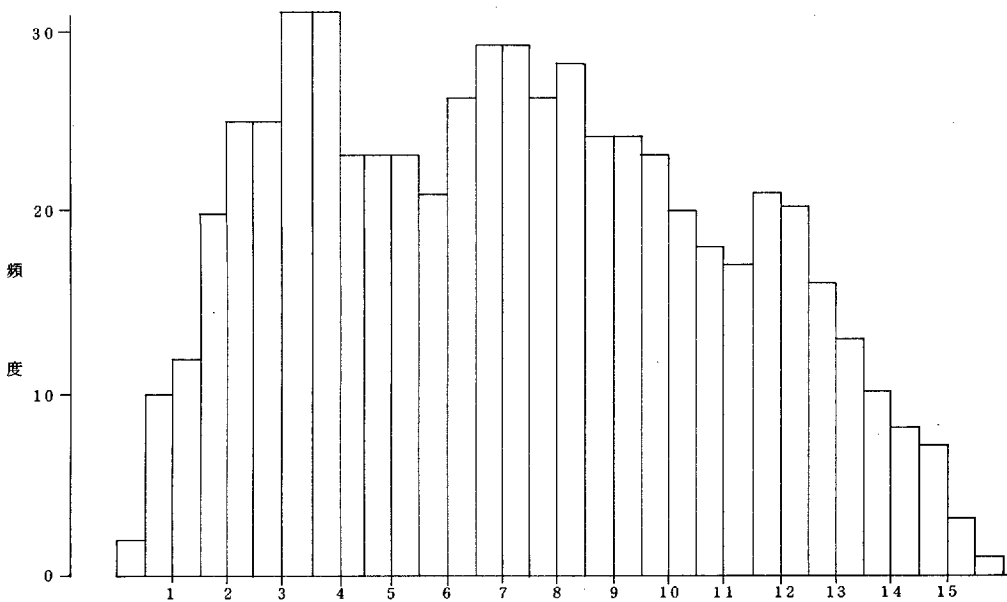


表 1 発病の季節

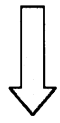
年 令 群 (才)	季 節		計
	冬～春	夏～秋	
-5	20	29	49
6-10	44	25	69
11-	21	11	32
計	85	65	150
χ^2	7.476		

表 2 発病時尿所見

年 令 群	糖				ケ ト ン 体		
	+～++	卅	卍	計	-～++	卍, 卍	計
-5	7	12	16	35	11	18	29
6-10	} 11	16	18	45	20	10	30
11-							
計	18	28	34	80	31	28	59
χ^2	0.73				4.72		

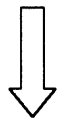
表 3

DIABETES MELLITUS IN MULTIPLE SUCCESSIVE GENERATIONS								
- 8 Pedigrees -								
Age at Onset of Diabetes (Yrs.)								
Generation	Family Pedigrees (8)							
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
I	41							
II	37	72	65	50	56	42	33	39
III	22	43	32	36	51	49	37	42
IV	4	12 8	11	7	13	12	11	12 13



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



対象は名古屋市名城病院,九州大学第 2 内科,鳥取大学第 1 内科,大阪市立小児保健センター,および本年度は東京女子医大小児科で丸山,稲垣の集めた患者を加えて,統計 169 人である。